馬誌

調習部

十四

和書門 類
一七三九五 號
一三〇 函
四 架
六二 冊

武備兵法

内閣文庫
和書 類
一七三九五 號
六二 冊
五四 函
二 架

内閣文庫	
番號	和 17395
冊數	62 (15)
函號	154 455

国立公文書館
National Archives of Japan

馬誌巻之十四目録

調習部

日本政府圖書
淺草文庫

馬誌巻之十四

調習部

一　一百僻を直すに子細あり銜をはめて諸手つ
かゝ引り繋きて腹帯を結てしちかねを
下け鞦の左右の環よりに縄を一筋つゝ付て
一つゝ鞦て尻合より下腹のうちこの縁に
通して二つに分て取り僻あるものを直
し　秀幸論下同

一 底まて通る手綱といふハ歎んにあり是ハ馬杖
んを知らんと乗りけりこの人の乗るにと
んも知られ馬にハ乗と好て手綱を元さまに
に返さらすへし 二足三足ハ分際にてハ心知ら
れす歎んにありといふハ人の歎の如し更に
飽にあるへうにれぬ中にても返さらむせとの
言葉なり強く返さす時ハ手の隠されにも
顕るなり返さされハ内に馬の心も知らすなり必
綱を秘すへし

一 或人馬上の秘傳として物語に云く大馬にも
自在に乗りける比の如きにまて手綱を十文
字に取て左手綱を鞍の手形に掛て手綱を
踏へて乗へし 翁物語

一 ゐるを乗るに手綱の二重やうの悪き事を嘲り
て八鉢手綱といふ事武家の古記にも
見えしより乗馬方にいふ書に 小笠原刑部大輔信綱記云く 手
綱を長く取のべて臂の後へまはる事ハ八たち
八鉢を八回にあれといふ 物貫ひの童子のするなり と手綱といひて悪きなり

中くゝまり　舳艫訓

一 手綱納様ハ手綱を取て下より上へ我帯ニ引抜き之支を女方へ引張り其端を左右より又帯に挟むなり腹を太くしたれハ張合腹を細くしたれハ其緩ぬくるなり 翁物語

一 免引手綱といふハ場中にて馬出さんとする時左右の手綱を引締めてまつ免し引合て乗なり本の口と成り右の足に直る時口をしらせぬやうに免し然へきなり

一

免引と名付る事ハ約合を委く説りたるの口ハ引と放との二つより起る約合をする故なり萬端の手綱も免引より発るへし免引の徳ハ大切なり是を貴ふ義して免引をハ父母と説り父母ハ天地の理にして車と物くに離る事なし別ち海潮も去し引の二つ呼吸もつくひくの二つなるの口ハ勿論引放の功によるる是を以て天地運行と同し理なる事なり

免引の手綱ハ引縮め又引合て乗ときハ場
中にて翔出さんとする時の事なり此時
引縮る事よく免す機変もある事
なり引合て乗ときハおりしく抱るなり
抱へられて聴く自然落む時ハ免すなり
り本の口本の足にかゝさん為に引合
乗事なり本の口本の足ときハ翔出さる
前の能足の手をいふ能成てハ手外内にて
免しして乗へし是を本の口に成と謂り

一 此乗ハ以「乗制」副ナる乗掛けなり 大坪流馬書下同

一 釣合手綱とハいふハ諢能馳る馬に可なり
場中にて馬出さんと成ときに左右の腰に釣
合ひ前輪に懸り引合て乗事なり
駻能ときハ中諢以上のこの心得へし翔出
さんと鞍下に置く時左右の腰に釣合ふハ
時ハ鞍下重くなり先心を鞍下へ延へし又
前輪に懸り引合すれハ仙脛を塞く
事へ出る事成難し 引合乗ときハ引放

せして宜かるなり

一　馬一段く過て抱へ悪き時は左手の内を
強く取り片方つゝ諷しく互違に引へし引
ぬ間敷は會釈を以てちやつくと寛てくれ
強くは免されぬなり唯引は免も掌の約合
計なり

一　馬一段過て抱へ難儀さるゝに先を取
られ危き時の事なり手の内を強く
取らは手綱ゆるめは引取られて
悪し片方つゝ諷しく引くは抱へらる計しく
不は悪し左右へ鐙を抜替る時は首中の一の
る内へ入る力を出させ事難儀し引さる
罰は會釈らひて宜へし向へ直に行を
左右へしきりに取へし向んを和しるる
為なり強くは免されぬは其曲の志つま
らぬ時は免すは悪し和きて後免され
へし此事を臆て緩ちて放會釈といくなり
掌の約合計りなりといふはゆるめて十分る

業を鞦鞭まてする事まてハわろし故く
手繰の徒鞭の徒とそれしく具りてあり
手綱ハ手此内の釣合計りにて鞦鞭の
業ハ強き時の位なり

一 引て免す手繰ハ詰免しの心のかゝり内筈
左金吾云く手の内ハ生捕れ心のなり引
詰しむるハ手きこの内なる人の事なりとき
時分にハ免す事成就する心なり
内筈左金吾ハ手綱ハ生捕の心のしくハ

つり手繰ハ取へきの理鞦ハ踏へきの理
なり此理を知さる時ハ手繰を以て強く
引左え抑て害をなす其業ハ引く免し
切く留しの功なり引詰むる家人とも
手ゆこの故故手繰の功をなしかたし

一 日讀の手繰とハ悍の馬に可有り鞦直るく
こ前輪に懸り居木先を股にて挟み鐙
を一文字に踏なり手繰長きときハ中指
と人さし指まて取詰へし是を一寸詰と

いふなり
此出鐙ハ鐙のさかる用也鞍あるとハ鞍の
上より居木を据る事前輪に掛り居木
先を股にて挟むといふハ重く乗る事な
り然て鐙の馬上ハ前輪をさして乗
ことハ其心鍾を塞く理なく少しハ宜
きさの為なり始より前へ出る事ハ悪し
下鐙ハ後輪より乗へし前へ懸れハ鞍下
軽く成て悪し鐙を一文字に踏事ハ

掛りに踏ことをいふ鐙ハ鐙のさかり
出過れハきうくつ也流し過れハ翔出たる
なり手鐙の長き時ハ本文の如く詰へし
中指と人さし指にて謂る馬の口へ引付
さす様浩へきなり指我折なく日読
出鐙とハ名有るなり

一 小割の出鐙鐙のさかり可なり強きハ的合
強きゆへさかり中れハまうけ割する事あり
支を二寸計割てしめ免しをしてのせへ

一 きふり

是ハ碑の馬及ひ口の強き馬ふり其強さに懸り翔出たふりニて強さ掛る由へ細口ニて割る丈を結ハせんとすれハ荒立て悪し割たるをさます撤て柔へしと因よしめ免しをされハ自ゆふ結口よふり此方より割ハ口を大にあく馬の方よりあくゆへ小割と成付しと申しなる馬ハ後ニハ舐の出る事あり

一 口強き馬ハ二引ひきて請ぬ所ニて免すへし退去ぬすに請合ぬをハ退去すれハつらくきつきよしし免しを柔へし

一 口強き馬ハ口をあきて引ふりニも明くにて強きハ知きるとのふりも明き掛る所を口を引て戒めて放つ鑣を請さる所ニて放つへし請合所ニて放つハ悪し退去すて退去ずざるを無理よしてハ退去ずやす引よつして折目強みを柔そて後に退

支へし轡ならされハ退さする足をま
ち返し免して乗といふ

一 間ハ手綱ハ地口強しかける馬退去りする物
を見るまゝ一条まて留らぬとも是等を可ふり
口強く乗人を引立こゝ行ハ衡のたゝみを左
右へおしこゝ引出し乗へし口を強ふ々
けまハ引る事ふし曳り出るを留める
よハ鑣を抜出し抜出し一条のやうに留
るまり退さするよハ退さする形まて後編に居

て乗口を強く当りて左右へ鑣を引出し
引出しすれハ歩み出るなり此時ハ下口に
て乗へし留り切ふすれハ諍こと口を当
り詰免しをして留るなり口を會釈らひ
打まてをハ引抱へて衡令釈らひの時く
免すへし是皆間の手綱なり

此手綱ハ古来よりの手綱なり間ハ強く弱
くの留をつふ地口強きハ道よりて口強
きをつみ乗人をも引とき左右へ鑣を引

出して乗鐙直に定る時ハ弦懸ハ悪し左の
乗然にて馬力を出す時ハ左へ取申に
鉸く鑣を抜へし亦退去るにハ後輪引
乗るへし込つる。蹬馬に乗ら口ハ小詰く当る
事ハ胴の元を口先へ取なり下口にて乗
右ハ約合を下口に持たれハ勢ひ負へき
成り留り切らん折ハ鞠の止り口なり又
ハさらりと引見しをすへし抱る事を
捨てさらりと当てへし又會釈らひなと

こハ抱へ込て乗馬の方より會釈らひのこ
き見すへし口に會釈らひなきハ口の弦
きなり其口を抱へこせ後るの方より會
釈らひのときに見たれへし是皆會釈
ちへ附のゝ探しハ名付るなり

一 巻簾の手綱を引ところ左にても右にても一
摑み一摑ミ下へ切下け上へ摩上けこして
亦下へ切下け廻したへし廻らさる時ハ摑み
たる方を解き摑ミまさる方へ返すなり

云事ハ轡を二三遍も斎へきなり
人を引馬ニ用也右文の通り下へ切り上
へ磨上るハ粕口也へ磨させる為なり是
を巻麗と名付る事ハ下へ下げ上へ巻上
る故名とす輪を二つ三つも斎事ハ馬
ニ利を仰させましき為懲しめて斎
なり強き業をせんして能覚る事を
覚也

一 指合の手綱といふハ轡出るとき前轡に掛
り強く口を指合ひ居木移りして斎こら
よしして向口を引放て斎へきなり
右輪ニ掛るといふハ前に説り強口を指合
ふ事ハ粕口也く痛みを自ら知り居
木移りハ胴へ向先を返さん為なり
向口を引放す事ハ先んを忘れさせ
る為なり本の口ニ成ときハ引放をし
て斎へし

一 操上袖返の手綱といふハ馬除りて手綱

一 自然に長く成たるハ延たる方を一絡ひ
絡て乗へしてる静まりて後に孫を半の
如く右法で免引き會釈らひをして乗
つるなり

一 馬餘るといふハ手に餘るをいふ其時手綱
長しなとハ一方を取絡ひて乗へし其
端の留を合する並合常の如き合お
なり操上袖返といふハ一絡ひ巻上れハ操
上けに成其時袖も返るゆへ名とす

一 諸引手綱といふハ躍の馬に可成り前輪に
掛り少し立透して手の足沢り隨ひて
そろそろと引合ひ諸引にて乗へし亦大
鬼の首様にけ引がよし
此ハ足の躍る馬に用る駒にあるもの也
り出て掛り立透すとハ新駒共荷を
重しとせん先ぶをせむる躍りつき
鞍あしくも浮き沈みをして乗り躍
の内にも拍子に引ハ沈乗り又鬼に引

とらへハ丈夫に乗へし大虎とらハ喰ふけ
押懸り行を以て是非左右の廻りけり
乗時ハ足軽しする是非村雨乃鞍と
いふハ村雨降らハ急んといふ心にて常
へ掛る鞍のまへを此要有也するか如何
なれハ村雨の手綱とひくるもむへなり

一 外引の手綱といふハ弦のつるの下なり場
中にて一足早く乗時ハ人の見ぬ方の手綱
一 を平首へ押付る様有りして向へ押ん

あるへし乗時人のある方の鐙をハ強く
踏へし

一 弦のつるハ早足の馬総文一足歩む時に
右の如く乗へきなり押ゑハ策の如く持
まて鞭を挙し人のある方をハ強く
鐙をふむ拳ハ人に見さる方を強く
押す鉾よひつミを舟ましき為なり
拳を策にして乗んなり

一 撥の手綱とハ下腹のつるれ延足にて可有

一　り塩末にて片手綱にて上け橋金の上へ拭
け割舟て容おもり同し強き方を思ひ
引しめて容へし
一　塩末まて橋金の上へ手綱を上れハ癖
上腰へ当て胴の気口先へ叢るあり又
口を隅まて割舟容ても有りとも隅を
廻りしてハ免れへし一向ま也り容くハ
力出て自然と後輪を拭るへし強き
方を思ひ引しハ強き方を引てハ濡る

ゆく馬も知らす人も見さる抵よ引て
目よ立事なし人の見ぬ物引ハ古人
口の内の策ともいへり
一　蹈盗鐙といふハ弾より拡のするよりな
り塩中まて出さし擲ときハ弾一方を蹈
下け口強き方の手綱を出し引詰めて
含救ひ容へし
一　弾袴といふハ中弾より上の弾をいふ一さる
ハ塩中まて翔出さんとする時ハ物一方

の縦を踏流し一方ハ踏出す前胴
へおへりて出るなすあり口強き方の手
綱を少し引諸るとハ躰を均合するなり
り強る時ハ鞍上正しくなるなり

一 釣舟の手綱とハいふハ肩を出し引るよ
所なり懸る方の手綱を揚末よて折廻
引しめ引しめ乗るなり揚中よても右の含
絞しひ所なり
揚末よて折廻し引しめ乗るとハ肩を出

し引よ遠へ引の如く折合るなり揚中
よても同断なり是を釣舟と号する
ハ釣ものハ川の中へ杭を立て舟をつ
なく綱る時ハ舟波よて廻ること如しよ
乗るもよきなり

一 血よ引さるるをハ疲るへハ左へ添て右へ引左
ハ左の手綱を指窓け鞍へ押へて右の手
綱を手ぐし取て跳ハこゝ免し編るへし右
へ添て左へ引如き時も同断なり

一 肩を出し行あらはれる方の上搦
を引かへ捻ぞ悪し 左へまはれる時は
右のもされぬ方の上搦を高く取る
則ち胴の気を移さるゝなり

一 打切打合の手搦は觜を曲るように曲さる
方を強く引切に切べし 手後引遠への
鑣の會釈ひとしきなり
觜を曲るには口先計り曲るなり 曲さる
方の上搦を引けは曲る方の顋へ鑣

寄る也へ和らかに引切に切らはさえて上
の内より引なり 手後引遠へ鑣の會
釈ひとしきには掌を仰けに引方を上る
なり口先直く成しするしき是を手切る
なり打合とは寒(さえ)て物を打ぬしたるを
いふ打合はさしき違へ鑣の如し打合
ふ也へなり

一 落手搦は片鑣を請るるに可なり 請さる
方へ一度に先し請る方へ鑣を引抜へし

一 度ゝ此の如くすれハ請をみる趣なり唯
常の會釈ふひきゝなり
片攄請るときハ攄をうけ口先ニてひつむ
るゆふ是ハ弱き方へ引なり放しときハ要
を一度に放つなりすこし左極片口ニて
むづかしきときハ總をさし参なり請
さる方へ一度ニ引請をみて會釈
らひ専らなりされども口ハ強きを引ハ
粘口しなり上手ハ強きを能知て和る

き弱を助く攄を無理ニ抜ハ悪し攄
を抜ときハ蹄ニて下根ニ取り外の方へ抜へ
し其外むつかしきハ縄を用ゆへし

一 片口強くして鑣を抜せぬるときハ弱き方の
羈の總を同しく左方の手綱ニ取添會釈ふひ
て参へし必す攄を抜へしと手の内を和く
かつして馬の気をちゞつして参へきなり
鑣を抜さる底口ニて強く剣をうけるる
ハ底口ニ歯るハ悪し馬に知らせぬ本

文の如く弱き方ハ羈をとりて手綱を持
そへ添べきなり橋金の角にて志める
ゆへ能抜るなり抜しる時ハ諸事みれ
會釈じにて乗べし是を免をとつ
して乗といふ

一
裏表の手綱ハ片口の馬に有なり弱き方
を和らに引ハ引れども口を伸たるなり
手綱を免せハ馬利を得て弱き方強
くなりたる也されども口を直すことのなり是を

裏といふハ口強き方を引きしとするを引し
め持なり其時銜を會釈らハそろりと免
すべし口和らくものなりへるを直すゆ
へなり是を表といふ
片口の馬よりし弱き方を引ぬ引きし
とおる時さし免せたるの利と成象
人まけるとんも得強みを出すゆへ諸
聽とするこれを裏といふハるの方よ
り直す故なり強き方を引しめ持とハ

馬に掛ち和らけて免ち戒をしてつる乃
ようときく免ちなりつるまけるもの表とも
いへるなり

一 尻股の中骨弱く前足堅く皮間骨とゑに
掛合て強つるの口は割目深く吭の根を及
して足本を見ねして騂り人を引つるを
いふ庭中にて翔廻を乗へし前編に掛り左右
の鞭を同しからに蹄左右乃脛を透し腕を
延て左右ともに綱を同しくもり取り下ろし

一 掛け會釈らひ左右の蹄へ詰て免しし二足
三足歩せてハ詰免しく乗ハ強き下首も折れ
尻股弱きつは乗助けられて組なりくせ口も定
まるものなり

尻股中骨（見帰の鞭を ものなり(?)）とこハ鶩鼻骨をいふ
漢に鳥頭といふ前足堅きこくハ窕りつるを
いふ皮間骨といハ付根の窕のあいをいふ口
の割目ハ漢に裂目といふ深きハ物を組
喰ふもいふ一分に掛るもの能ましてハこれ

を嫌ふ浅き者も有これ吭の根及ぶるハ足
元を見さする故へ武馬に悪し二庭中に
て翔廻しを乗べし或ハ中に柱を立丈
に鐶を付け輪を挙もちし氣をひし
て挙掛なりに轡抱へハ荒へ外る皮角
骨強きもあらしくなり

一 志嬉ゝと鞭といふハ物に靡き付る馬に有なり
付しつる方の手綱を引詰て足を直すとき
免し付ぬ方の手綱を引腰を撥り後蹄に
乗そろへしと引へし引れて頭計り曲れハ鐙
まて口の下を蹴付け手抜返し寄きりと
さらりと引へし
駕籠乗物なとハ跟しすし堀よせり付るかね
こうしめおなじ指付るときハ指付る方へ折
ゆへ足も胴も違へてよしとも首曲る
すハ口の下を蹴へし衡をさらりとし
て挙り手返せハちゞみ上照り高くり並行
されるなり志嬉ゝといふハ付方を引

作を得て貴人にあひても不禮なせさる
故よろこぶんにて名付るなり

一 空手綴の手綴ハ地道をかきて馬に行なり
手綴を巻やりて引合ひ鞦を結へし
地道かきてハ故て無手てハあし乗りよ
引なをいふ手綴を巻とハ手を仰むける
なり鞭る时ハ上腿に当るゆゑを嫌ふ
鞦をとるハ後輪に掛るをいふ小荷鞍に
ても荷重きハ鞍踏毎るなり

一 鴨の乱口といふハ姿返すよふし返す方の
手綴をさうしと小引をして大廻しに返
すへし
鴨の乱口とて小引ばかれるとハ内の方を小
引なまて外ハさうしとお鳴すかり馬
れんを発し大廻しに返に是を鴨の
乱口と古来よりいふ鴨ハ風に向ひ水
中に集り觜を水中に入り首をあげて
順に巡る一羽ハ廻りても十も五もつきて五六

さし廻る事を如く柔かへに名とす両肉
の過しつるも弓の如く廻すへし
一 應秀の曰く引く免すとハ二つの事ハ手綱
は父母なり國忠の云く何として引免を
手綱の父母とハいふそ秀の曰く弓の術
に大成しといふも是亦引免の二つに至極せ
りるも是如く諸事は習ひありといふとも
引く放つとの二つは手綱を以て常馬の
至極とされ候へハ出る馬殊り弓の業を

和らくるも引と放つの會釈或ハ切曲。二様
曲。立曲。逆曲。込曲。是外種々は曲馬の気を
持しまらせて直にするも引放の手綱なり
手しつ口を和しつるを能くするも癖を喰
止て身に懸るを解しにも引放は會釈に
てあるなり然て味手綱ハ馬の口を和け
けて口を強くたし是を止て是をすくふ
し口を和らけて口を強しすれて弱き事な
に用ゆれハ勢を却へ強き事に用ゆれハ

和らしあり識に一生徳勝て計るへからさ
るの手裡なり
これ此書の一要とする所なり引危の手
裡を父母といふハ弓馬の両翼の如し弓
の理を以て弓に押て説しもの百發百
中も引と放つの二つ諸手裡あれとも味
二つに止る諸手裡是より出るもの父母
といふなり翔出されるにハ引て放つ
もへ気を轉され立も蹬も込も一生如し以

を閑しを結ばせるにハ底口に強く當り
引放つへし喰しめ引も一些歯に當り引
放をなするなり下弾のつるに用ゆる時ハ
陽の引放を用ゆ口を強くなするにハ口へ
當る氣を發す時に放つ弱きても強く
成るなり引と放の徳にて恰も古の妣
し薬種にてハ甘草の如し盗に用ひハ
煖うにする熟にハ盗され識に妙にして
一生徳盡し難し

陰の引放しの事

弭の馬陽曲に用ひ静に引清く放つ静に引とハなまりてハ悪し速になれるなり

陽の引放しの事

下弭に用ひ手の内をさえて軽くもつきりしけるなり

陰に引て陽に放つ事

是ハ弭よし粕口に用ひ引ハ陰に引放ハさえて放つなり

陽に引て陰に放つ事

口痛の下弭に用ひ陽に引て馬の気を發し放つ時陰になれハ痛に当らぬよく引なり陽に引ハ清く軽くなるなり

以上大坪流馬書

国立公文書館
National Archives of Japan